



中国農村における
二つの道の闘争

北京 外文出版社

毛主席のことば

農村の陣地は、社会主義がこれを占領しなければ、資本主義がかならずこれを占領する。いったい、資本主義の道も歩まなければ、社会主義の道も歩まない、などということがありうるだろうか。

中国農村における
二つの道の闘争

『人民日報』『紅旗』『解放軍報』編集部

(1967年11月23日)

外文出版社

北京

中国農村における二つの道の闘争

『人民日報』 『紅旗』 『解放軍報』 編集部

(一九六七年十一月二十三日)

いま、農村の情勢はたいへんすばらしい。何億という貧農、下層中農が都市の広範な革命的
大衆と同じように、十分に立ちあがっている。かれらは毛主席のプロレタリア革命路線にみち
びかれて、私心とたたかい、修正主義を批判し、社会主義的自覚を大いに高めている。偉大な
革命運動は生産に新たな高まりをもたらし、ことしの農業生産は大豊作をかちとった。農村は
いたるところ、いきいきとした気運にみちている。

中国のフルシチョフの農村での反革命修正主義路線をいっそう深く批判し、その害毒を一掃
することが、現在、農村のプロレタリア文化大革命を発展させるうえでの重大な戦闘任務で
ある。

中国は五億余の農民を擁する大国である。農民問題を正しく解決することができるかどうか

は、わが国の民主主義革命の成否を左右する鍵であったし、また、わが国の社会主義革命の成否を左右する鍵でもある。全国的な勝利ののち、中国の農民を社会主義にむかってみちびいていくか、それとも資本主義にむかってみちびいていくかが、プロレタリア独裁の運命を決定し、社会主義制度の運命を決定してきた。

まさに、このようなもつとも重要な問題をめぐって、解放後十数年らい、一貫して二つの道、二つの路線の真っ向から対決するはげしい闘争が存在してきたのである。

すでに全国解放の前夜、われわれの偉大な指導者毛主席は、「重大な問題は農民の教育である」、「農業の社会化なしには、全面的な、強固な社会主義はありえない」と指摘した。

われわれの偉大な舵手毛主席は、農村の社会主義革命のためにマルクス・レーニン主義の路線を定めた。これは農村での資本主義的搾取を消滅して、農業の集団化を実現させる路線であり、農業戦線での社会主義革命を徹底的にやりとげ、農民をみちびいて社会主義のひろびろとした大道をあゆませる路線である。

ところで、資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派、中国のフルシチョフは、十数年らい、農業問題でどのようなことをやってきたのだろうか。

農業の社会主義的改造が基本的に完成されるまえは、かれは必死になって富農経済を保護し、発展させて、農業の社会主義的集団化に反対してきた。農業の社会主義的改造が基本的に完成されてからは、かれはさかんに資本主義復活の活動をおこない、社会主義的集団経済を瓦解させ、気違いのように農村の社会主義革命を破壊し、広範な貧農、下層中農に反対してきた。かれは真正正銘の反革命修正主義路線をおしすすめてきたのであり、これは農村で資本主義の復活を実現させようと夢みる路線、つまり、事実上、地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子を復活させる路線なのである。

毛主席のプロレタリア革命路線によって、中国のフルシチョフのこの反革命修正主義路線を系統的に徹底的に批判することは、社会主義の道を堅持し、プロレタリア独裁をうちかため、修正主義の根をとりのぞくうえで、ひじょうに重大な、現実的意義をもっている。

中国のフルシチョフは富農経済の熱狂的な鼓吹者である

中華人民共和国の成立は、わが国の民主主義革命が基本的に終わり、社会主義革命が始まったことを示すものであった。

一九四九年三月、毛主席は中国共産党第七期中央委員会第二回総会での報告のなかで、「中国革命が全国で勝利をおさめ、土地問題が解決されたのち」、国内の基本的な矛盾は「労働者階級とブルジョア階級との矛盾」である、と指摘した。

毛主席はまた、「国民経済の生産総額の九〇パーセントをしめる分散した個人経営の農業経済と手工業経済は、慎重に、一步一步、しかも積極的に、近代化と集団化の方向へ発展するようみちびくことができるし、また、みちびかなければならない。なるがままにまかせざるはまちがっている」と指摘した。

毛主席のこのマルクス・レーニン主義の連続革命の思想、すなわちとどまることなく、ブルジョア民主主義革命の段階からプロレタリア社会主義革命の段階へと移行する思想にもとづいて、土地改革以後、鉄は熱いうちにきたえよといわれているように、時をうつつさず互助・協同化運動を発展させて、農業における社会主義的生産関係を一步一步うちたて、社会主義の道をあゆむように農民をみちびき、農村における資本主義に制限をくわえ、それを消滅するべきである。

中国のフルシチョフは、毛主席のこのプロレタリア革命路線に真正面から反対し、地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子の利益を代表して、すぐさまとびだしてき、熱狂的に資本主義を宣伝し、やっきになって社会主義に反対した。

第七期中央委員会第二回総会の閉会後まだ一ヵ月あまりしかたないのに、この中国のフルシチョフは天津にかけて、恥しらずにも資本家をもちあげ、悪名高い「搾取有功」論をうちだした。

全国解放の直後、この中国のフルシチョフは、こんどは富農経済の発展を大いに鼓吹した。一九五〇年一月、かれは大裏切り者安子文にあたえた黒い「指示」のなかで、データラメにも「現在、搾取人を救うものであり、搾取を許さないのは教条主義である。いまは、搾取しなければならず、搾取を歓迎しなければならない」①などといった。

かれは、毛主席が第七期中央委員会第二回総会での報告のなかで提起した、農業経済と手工業経済を「なるがままにまかせ」てはならないという論点にたいして、さかんに反論し、「作男の雇用や単独経営はなるがままにまかせるべきだ」、「いくらかの富農があらわれてくるのもわるくはない」といった。かれはまた人を雇って田畑をたがやすのに「制限をくわえるべき

① 『安子文らへの指示』、一九五〇年一月二十三日

ではない」①、それは「合法的」であり、「貧乏人のためにもなる」②と宣伝した。

かれはさらに、「ウマ三匹、スキ一ちょう、車一台をもつ農家を数年のちには八〇パーセントにまで発展させるべきだ」③と気遣いのようにわめきたてた。

かれは同年六月におこなった演説のなかでも、「富農経済を温存する政策」は、「一種の長期的政策である」④とのべた。

われわれは、吸血鬼の口をつけて出てくる、こうしたわめき声のなから、農村の資本主義勢力が社会主義をのみこんでしまおうとする、あの搾取階級としてのどん欲さと狂暴ぶりを見ることが出来る。これこそ、徹底したブルジョア階級の人食い哲学である。

なにが「搾取は人を救う」だ。なにが「作男の雇用は合法的」だ。それが「救う」のは、ブルジョア階級の人であり、それが「合」っているのは、資本主義の法である。資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派は搾取制度をこのように熱狂的にほめたたえ、極悪非道の賞銀奴隸制

①③ 『安子文らへの指示』、一九五〇年一月二十三日

② 『七番目の姉への手紙』、一九五〇年五月二日

④ 『土地改革の問題について』、一九五〇年六月十四日

を「極楽浄土」のように描きだしているが、かれの五臟六腑にまつているものがどのような黒いしろものであるかは、ひじょうに明らかではないか。

なにが「ウマ三匹、スキ一ちょう、車一台の農家を発展させる」だ。すこしでも常識のある人なら、広大な農村で、ウマ三匹、スキ一ちょう、車一台をもっている農家が中農などではなく、富農であることをだれでも知っている。ウマ三匹、スキ一ちょう、車一台の農家を発展させるというのは、富農経済を発展させ、資本主義に農村の陣地を占領させて、広範な貧農、下層中農をふたたび抑圧と搾取の悲惨な境遇におとし入れ、労農同盟を破壊し、プロレタリア独裁を破壊することなのである。

なにが「制限をくわえるべきではない」だ。この資本主義の道をあゆむ最大の実権派が富農経済を熱狂的に賛美するのは、社会主義の道をあゆむ広範な貧農、下層中農の積極性に「制限」をくわえ、それをしめ殺して、資本主義勢力に道をきりひらくためである。かれのいう「制限をくわえるべきでない」ものは、資本主義的搾取だけである。これこそが、かれのいわゆる「自由」の階級的内容なのである。

中国のフルシチョフは大衆をあざむくために、なんと黒白を転倒させて、「ウマ三匹をもつ

た農家が七〇パーセントになってはじめて、将来、集団農場をつくるのに都合がよい」①などといった。

かれは、腹の底から憎しみをこめて、「単独経営に反対するものをみな集団主義者だなどと考えてはならない」②と貧農を中傷した。

これは貧農にたいする大きな侮辱であり、また社会主義的農業集団化にたいする極度の歪曲である。毛主席は、広範な貧農、下層中農には、「きわめて大きな社会主義的積極性」があると指摘している。かれらは過去に地主や富農から残酷な搾取をうけており、搾取制度にたいして深いうらみ、大きな憎しみをいだいている。土地改革後、かれらの生活は以前にくらべてある程度向上したか、あるいは大いに向上したとはいえ、多くのものの経済的地位はなおおひじょうに苦しい（貧農）、あるいはまだ裕福ではない（下層中農）。このことは、かれらが単独経営にだんこ反対し、資本主義的搾取制度にだんこ反対して、社会主義的集団化の道をあゆむことを積極的に要求するよう決定づけている。かれらは、党が農村で依拠する勢力であり、農村の社会主義革命の主力部隊である。貧農に打撃をあたえることは、革命に打撃をあたえることで

①② 『安子文らへの指示』、一九五〇年一月二十三日

あり、社会主義に反対することである。富農に依拠して「集団農場」などをつくっても、それはひとかけらの社会主義も生みだすことができず、百パーセントの資本主義を生みだすだけである。

「ウマ三匹の農家が七〇パーセントになって」はじめて集団化ができるというデータラメな「理論」は、むきだしの資本主義的搾取をイチジクの葉でおおうものにすぎない。単独経営の農民の七〇〜八〇パーセントを富農にするなどというのは、まったくのペテンであり、もともと不可能なことである。しかも、だれもが知っているように、富農経済が農村を支配するときこそ、「七〇パーセント」以上の農民が、地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子の抑圧のもとでふたたび苦しい赤貧生活におちこむときである。これこそ、中国のフルシチョフが「貧乏人」にほどこす「恵み」なのである。

中国のフルシチョフは、かれのこうした一連の反社会主義の理論を、「いま、新民主主義制度をうちかためるためにたたかおう」③という社会主義革命を否定する綱領にまとめあげた。

③ 『政治協商會議全國委員會會議での演説』、一九五一年十一月四日

「新民主主義制度をうちかためる」とは、ブルジョア階級の利益を擁護するということであり、都市と農村の資本主義を發展させるということである。つきつめていえば、解放された中国をふたたび半植民地・半封建のふるい道にひきもどすということなのである。

この反動綱領は、毛主席にきびしく非難された。一九五三年六月、毛主席はある演説のなかでこれに正面から反対して、このような提起の仕方は有害であると指摘した。毛主席は深くほりさげてこう指摘している。過渡期には矛盾と闘争が充満している。われわれの現在の革命闘争は、過去の武装革命闘争にくらべていっそう深刻でさえある。これは資本主義制度とすべて搾取制度を完全に葬ろうとする革命である。「新民主主義の社会秩序を確立する」という考え方は、実際の闘争状況にそぐわないものであり、社会主義事業の發展を妨げるものである。

毛主席のプロレタリア革命路線は、資本主義を發展させようとする中国のフルシチョフの路線の反動的本質を徹底的に暴露して、偉大な社会主義革命のためにはっきりと方向をさし示した。何億という農民が参加する偉大な社会主義革命がはじまった。いっそう鋭く、いっそう激烈な二つの道の闘争がはじまったのである。

中国のフルシチョフは農業協同化をしめ殺した

資本主義の道をあゆむ最大の実権派である

プロレタリア階級の革命党が農民を協同化の道をあゆむようにみちびくことは、マルクス・レーニン主義の基本的原理の一つであり、毛主席の一貫した思想である。一九四三年、毛主席は『組織せよ』という偉大な呼びかけを発し、つぎのように深くほりさげて指摘した。「農民大衆についていえば、かれらのあいだで何千年らいつづいてきたのは、一家族一世帯を一つの生産単位とする小私有経済であった。このような分散的な小生産こそ封建支配の経済的基礎であって、農民を永遠の貧困におとし入れてきたのである。このような状態を克服する唯一の方法は、しだいに集団化することであり、集団化を達成する唯一の道は、レーニンがいつているように、協同組合の道へることである。」

全国解放後、土地改革の完成にともない、農業の互助・協同化運動は、毛主席のこの正しい路線にみちびかれて、新たな段階にひきあげられた。

一九五一年、山西省などの広範な貧農、下層中農は、毛主席の教えにもとづき、互助組を一

歩高めて試みに農業協同組合をつくることを要求した。これは偉大な革命行動である。ところが、中国のフルシチョフは毛主席にかくれて、ある報告書のうえに憎悪をこめてつぎのような指示を書いた。「土地改革後の農村では、経済の発展過程で、農民の自然発生的勢力や階級分化がすでにあらわれはじめている。党内ではすでにこのような自然発生的勢力や階級分化に恐れをいだき、しかもそれを阻止あるいは回避しようとする一部の同志があらわれている。かれらは、労働互助組や購買・販売協同組合の方法で、この趨勢を阻止あるいは回避する目的を上げようという幻想をいだいている。私的所有の基礎を一步一步ゆるがし、弱め、最後には否定して、農業生産互助組織を農業生産協同組合に高め、それを新しい要素として、『農民の自然発生的要素にうち勝つ』べきだ、という意見をだしているものがある。これは一種のあやまった、危険な、空想的な農業社会主義の思想である。」①

みてもらいたい。農業協同化をしめ殺そうとしたこの資本主義の道をあゆむ最大の実権派は、社会主義の道をあゆむ貧農、下層中農の積極性をどれほど憎んでいることかを。

① 『党山西省委員会の「旧解放区の互助組織をいちだんと高めよう」への指示」、一九五一年七月三日

中国のフルシチョフのこの「指示」は、毛主席に反対し、毛沢東思想に反対し、広範な貧農、下層中農を極度に憎むかれの自供書である。かれは臆面もなく、農業協同化の社会主義路線を「幻想」だと中傷し、現実生活のなかで資本主義勢力をつきやぶって発展してきた社会主義の新生の事物を「危険」な「空想」だと中傷している。かれの反社会主義的なブルジョア階級の革命的立場が、ここでこのうえなくはつきりとさらけだされている。われわれは、社会主義を憎んでいるかれの歯ぎしりの音を、はっきりと聞きとることができるのである。

われわれの偉大な指導者毛主席はこの指示をみて、極度の怒りをこめて、このあやまった議論に断固たる反撃をくわえた。毛主席は、プロレタリア独裁のもとで農業協同化をおしすすめることについてのマルクス・レーニン主義のきわめて完全な理論を創造的に発展させるとともに、農業生産の互助・協同化にかんする党中央の最初の決議をみずから作成して、農業協同化運動の前進を勝利のうちにみちびいた。これによって、中国のフルシチョフの陰謀は破産してしまつたのである。

一九五三年、国民経済が基本的に回復し、全国の土地改革が基本的に完成されたのち、毛主席

席は、わが党の過渡期における総路線と総任務をうちだした。毛主席はつぎのように指摘した。一部のものは民主主義革命が成功したのちも、相変わらずものところにとどまっていた。かれらは革命的性質が転化したことがわからず、なおも、かれらの「新民主主義」をやりにつけ、社会主義的改造をやるうとはしない。これでは、右翼的な誤りを犯すことになる。農業についていえば、社会主義の道がわが国の農業の唯一の道である。互助・協同化運動を發展させて、農業生産力をたえず高めていくことが農村における党の活動の中心である。

過渡期における総路線という光り輝く灯台に照らされて、広範な農民の社会主義的熱情はかつてなく高まり、半社会主義的性質をもつ初級農業協同組合が、雨後の竹の子のようにあられ、急速に發展していった。こうしたすばらしい情勢に直面して、資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派とその一味はあわてふためき、いそいで命令をだし、「暴走反対」などとわめきたて、すでに協同組合に加入している農民を強迫して、「協同組合を脱退させ、互助組へ復帰させ」た。こうして、できあがったばかりの初級農業協同組合が、すっかりしめ殺されてしまったのである。

一九五五年、毛主席の偉大な呼びかけのもとに、農業協同化の高まりが、全国にひろまっ

た。ところが、中国のフルシチョフはまたも、毛主席が北京にいないときに乗じて、ふたたび「暴走反対」の犯罪活動をくわだてた。同年五月、かれは、もうひとりの資本主義の道をあゆむ党内最大の实権派と共謀して「停止」「縮小」「整理」という反動の方針を制定し、また協同組合の大幅きりすての計画をみずから承認した。その結果、二ヵ月あまりのあいだに、全国で二十万にのぼる協同組合がきりすてられてしまったのである。

いまになっても、この中国のフルシチョフは頑としてその罪を認めようとしていない。しかし、動かせない証拠は山のようにあり、言いのがれようとしても言いのがれることはできない。中国のフルシチョフがどのように詭弁をろうしても、それは、どこまでも頑固で、悪のかぎりをつくしたかれの反動的正体をいつそうはつきりと暴露するだけである。

中国のフルシチョフは、農業協同化運動に反対する「理論」的根拠をさがしたために、自分の大先輩ベルンシュタイン、カウツキー、ブハーリンといった連中の修正主義のゴミためから、「生産力論」というボロ武器をひろいあげてきた。かれは、「工業が国有化されてはじめて、農民に大量の機械を供給できるようになる」のであり、そののちに、土地の国有化や農業の

集団化がはじめて可能になるのである」①などと吹きまくった。

かれのこうした「まず機械化し、それから協同化する」という「理論」は、われわれの農業の社会主義的改造運動のなかで、とくに恥ずべき破産を上げてしまった。かれは、生産力のなかでもっとも主要な、もっとも活動的な要素である人民大衆の偉大な革命的役割を否定した。かれの「理論」には、生産力にたいする生産関係と上部構造の偉大な促進作用などが、すべて投げすてられてしまった。かれのこのような「理論」によれば、生産力の発達していない国のプロレタリア階級と貧農、下層中農は、民主主義革命の勝利をおさめたのち、時をうつさず民主主義革命を社会主義革命に転化させる資格もなければ、そうすべきでもなく、まず資本主義の発展を許さなければならない。つまり、機械がなければ、資本家や富農から搾取されるのも当然だ、というわけなのである。

もしもほんとうにかれのこのような「理論」にしたがって事がはこばれたならば、わが国の社会主義的農業協同化は葬りさられ、また社会主義的工業化も葬りさられたにちがいない。

もしもほんとうにかれのこのような「理論」にしたがって事がはこばれたならば、社会主義

① 「宣伝工作会議における演説」、一九五一年五月七日

革命の事業はとくに葬りさられ、われわれのプロレタリア独裁の国家もとくにブルジョア独裁の国家に変わっていったのではないだろうか。

「まず機械化し、それから協同化する」というのは、中国のフルシチョフが農業の社会主義的改造に反対し、社会主義革命に反対するための口実にすぎないことは明らかである。その犯罪的なねらいは、わが国の農村に資本主義を発展させ、地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子を復活させて、広範な貧農、下層中農を地主や富農のために牛馬のように働かせることにあった。

農業協同化運動が資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派によってしめ殺されようとしていたとき、われわれの偉大な指導者毛主席は、『農業協同化の問題について』という有名な報告をおこない、つづいて『中国農村における社会主義の高まり』という本のために、みずからまえがきと評語を書いた。毛主席は、これらの天才的、画期的な偉大な文献のなかで、農業にたいする社会主義的改造の問題を科学的、系統的に、完全に解決し、マルクス・レーニン主義をこのうえなく豊かにし、発展させて、理論と実践の面から中国のフルシチョフとその一味の氣違いじみた進攻を徹底的に粉碎した。

毛主席は広範な農民の社会主義的積極性を高く評価し、最大の熱情をこめて、つぎのようにたたえた。「現在全国の農村では、社会主義の要素が日々刻々増加しており、広範な農民大衆は協同組合を組織することを要求し、大衆のなかからはたくさん聡明で、能力があり、公正で、積極的な指導的人物があらわれている。これはひじょうによるこばしい状況である。」

毛主席は歴史の流れをばばもうとする中国のフルシチョフらの日和見主義をきびしく非難して、つぎのようにずばりと指摘した。かれらは完全に、「ブルジョア階級、富農、あるいは資本主義の自然発生的傾向をもつ富裕中農の立場に立って、比較的少数の人間のために考えているのである」。

毛主席は、農業集団化と社会主義的工業化との弁証法的関係を深くほりさげて究明し、中国のフルシチョフの「まず機械化し、それから協同化する」というデータラメな「理論」に批判をくわえた。毛主席はつぎのように指摘した。「わが国の条件のもとでは（資本主義国では農業を資本主義化させるが）、まず協同化してからでなければ、大型機械をつかうことはできない。」「われわれは、工業と農業、社会主義的工業化と農業の社会主義的改造という二つの事からをけっしてきりはなしたり、たがいに孤立させたりして見てはならないし、けっして一方

だけに力をいれて、他方を軽くあつかってはならない。」

毛主席のこの英明な論断は、つぎのような普遍的意義をもつ重要な問題に解決をあたえたものである。すなわち工業が発達していない国では、プロレタリア階級が民主主義革命を指導して勝利を勝ちとったのち、時をうつつさず民主主義革命を社会主義革命に転化させ、強力なプロレタリア独裁に依拠して、生産手段所有制の社会主義的改造を實行し、社会生産力の飛躍的發展を促さなければならぬし、またそうすることができること、工業がなお大量な農業機械を供給できない状況のもとでは、広範な貧農、下層中農の社会主義的積極性をひきだして、まず農業の社会主義的集団化を實行し、農業生産を発展させ、それによって社会主義的工業化と農業機械化のためにひろびろとした道をきりひらくことができるし、またそうしなければならぬことである。

日和見主義の邪気がはらい落とされ、社会主義の正気がもりあがってきた。毛主席の輝かしい理論にみちびかれて、何千万戸という農民大衆が行動にたちあがり、何億という農民の偉大な社会主義革命の怒濤が中国のフルシチョフらひとにぎりの化物どもの修正主義路線をまたたくまに押しおし、押し流してしまった。かれらの右翼日和見主義の正体は、大波に洗われて

すっかり明らかになった。農業協同化という偉大な大衆運動は空前の早さと激しさで発展していった。一九五五年の下半期からわずか一年あまりのあいだに、全国で農業協同化がくりあげて実現され、農業の社会主義的改造が基本的に完成された。二つの道の闘争のなかで、毛主席のプロレタリア革命路線がきわめて偉大な勝利をおさめたのである。

中国のフルシチョフは

「三自一包」の黒い風の大元締めである

生産手段所有制の社会主義的改造が基本的に完成されてのち、わが国の社会生産力はひじょうに大きな発展をとげた。一九五八年、毛主席がみずから制定した党の社会主義建設の総路線の輝かしい光に照らされて、国民経済には活気あふれる大躍進の局面があらわれ、わが国の広大な農村には人民公社というまったく新しい社会組織形態があらわれた。人民公社化の実現によって、農業集団化は新しい段階に躍進し、農村における資本主義勢力の滅亡をはやめた。

階級敵は失敗にこりないで、農村における社会主義の新しい勝利を腹の底から憎み、夢にも資本主義の復活を忘れなかった。

③

わが国の国民経済がフルシチョフ裏切り者集団の破壊と三年連続の自然災害によって一時的な困難にぶつかり、帝国主義、現代修正主義、各国反動派が反中国の大合唱をまきおこしたとき、中国のフルシチョフをかしらとする党内最大の資本主義の道をあゆむひとにぎりの実権派は、いまこそ「天下をくつがえす」ときだと考えて、大小さまざまな手下どもを指揮し、政治、経済、思想、文化などの各戦線で社会主義に向かって全面的な気違いじみた攻撃をかけてきた。資本主義の道を歩む党内最大の实権派は人民公社をさかんに攻撃して、「農民はこの数年間、集団経済から利益をうけなかった」①などといった。かれの扇動のもとで、わが国の農村には、「三自一包」（自由市場、自留地、自負盈亏〔損益に自ら責任を負うこと〕、包産到戸〔農業生産の任務を一户ごとに請負わせること〕）の黒い風がまきおこった。これは、人民公社を瓦解させ、資本主義の復活を実現しようとして打った、かれの大芝居であった。

かれは「資本主義のはん濫を恐れる必要はない」とか、「自由市場はやはりやっていくべきだ」②とか、「工業では十分に後退しなればならず、農業でも包産到戸や単独経営をふくむ

① 『下放幹部にたいする講話』、一九六二年七月十八日

② 『商品の「横流し」を禁止する問題についての指示』、一九六一年十月二十二日

ところまで、十分に後退しなければならぬ」①とか、公然とわめきたてた。

この点については、もうひとりの資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派の言っているほうが、もっと具体的である。かれはこういった。「増産ができさえすれば、単独経営でもかまわない。白ネコであろうと黒ネコであろうと、ネズミさえ捕ればよいネコだ。」

このふたりの資本主義の道をあゆむ党内最大の实権派はまた、自分たちの腹心や手先を各地に派遣して、「包産到戸」の「経験」なるものを「調査」させ、「砲弾」をかきあつめて、われわれの偉大な教師毛主席のプロレタリア革命路線を攻撃しようとたくらんだ。

「増産」に名をかりて、実際には、社会主義的集団経済を瓦解させ、単独経営を復活し、資本主義を農村で自由にはん濫させる——これこそかれらがうちだした「三自一包」の反動的本質である。

当時のことをふりかえてみると、「三自一包」をおしすすめるために、中国のフルシチョフは「指示」をだしたり、「報告」をおこなったりして、なんとわがもの顔にふるまっていたことか。ところがいまになって、この「修養」に徹した「大人物」は、三年にわたる困難な時期に、人民公社を「攻撃したことはなかった」などと、あつかましくも逃げをはっているのである。

① 一九六二年六月の講話

証拠が出そろっているのに、まだ言いのがれようとする。なんと鉄面皮なことだろうか。中国のフルシチョフが鼓吹した「三自一包」は、農村における資本主義勢力の必要にこたえて、裕福な農民の資本主義への自然発生的傾向を助長し、また投機分子や新しく生まれでたブルジョア分子のための青信号となった。中国のフルシチョフの黒い指示にしたがって、強引に「包産到戸」をおしすすめた少数の地方では、「責任田」とか、「田畑を一户ごとに割当て」とか、「收穫高責任制」とかいった資本主義復活のさまざまな手口がいつせいにあらわれて、集団経済に重大な影響をあたえ、それをひどく弱体化させた。

「三自一包」の黒い風がまきおこっていた期間、中国のフルシチョフの保護のもとにあったひとにぎりの反革命修正主義分子は、絶望のなかにととう資本主義復活の妙計をまたもさがしあてたと思ひこんで、みな有頂天になった。かれらはしきりにうなずきながら、「まったく、山はきわまり、川はつきて、道がなくなつたかと思つたと、柳しげり、花さくかなたに、また村があらわれる、とはこのことだ」といった。

これらすべては、中国のフルシチョフの極力鼓吹する「三自一包」が都市と農村の資本主義勢力をかきあつめて、農村の社会主義の陣地に気遣いじみた攻撃をかける一陣の黒い風であったことを、あますところなく物語っている。これは、人民公社の集団経済を破壊し、社会主義の土台をほりくずし、赤色の中国を黒色の中国に変えようとするものであった。これは、かれらが党をのっとり、政府をのつとる準備としてすすめた資本主義の大復活活動であった。

類は友をよぶ。資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派が鼓吹したこの一連のことは、フルシチョフやその後継者ブレジネフ、コスイギンの手合いがソ連の農村でおこなったこととまったく瓜二つである。

ソ修裏切り者集団の頭目連は「生産物自由販売の原則」をさかんにおしすすめ、市場価格への「行政的規制」を禁止する命令をだした。かれらは「利潤の高低を、集団農場と国营農場の経営活動にたいする客観的評価の基礎にすべきである」と宣言した。かれらはたびたび、「自留地」にたいする制限を緩和して、共有地を勝手に分配するのを黙認した。かれらは田畑の各小組、各戸への割当をさかんにおこない、国有の土地を公然と「法的に」各小組へ固定的に割り当て、長期にわたって耕作させた。しかも、一世帯に二、三人分以上の労働力さえあれば、

一つの小组をつくることが許されたのである。

まさに、このような反革命修正主義路線の支配のもとで、ソ連の農村では、私有経済がはん濫し、社会主義経済が完全に瓦解し、両極分化が日まじに激化し、富んだものはますます富み、貧しいものはますます貧しくなって、資本主義がすでに全面的に復活しているのである。

同志のみなさん、考えていただきたい。もし中国のフルシチョフの陰謀を実現させたなら、わが国の農村にはどのような光景があらわれたことであろうか。

社会主義教育運動をめぐるの大闘争

一九六二年の秋、中国のフルシチョフに代表される資本主義勢力が社会主義にたいして気遣いじみた攻撃をくわえていた重大なときに、毛主席はみずから主宰して、偉大な歴史的意義をもつ中国共産党第八期中央委員会第十回総会をひらいた。毛主席は、中国のフルシチョフの右翼日和見主義路線をすどく批判し、中国のフルシチョフがまきおこした資本主義復活の黒い風をくいとめた。

この会議で、毛主席は全党、全国人民にたいして、「絶対に階級闘争を忘れてはならない」

という偉大な呼びかけをおこない、「社会主義教育をおこなわなければならない」という偉大な任務を提起して、ブルジョア階級にたいするプロレタリア階級の全面的反撃の進軍ラッパを吹き鳴らした。それは耳をつんざく雷鳴のように、あらゆる化物をふるえあがらせた。

毛主席の指示にもとづいてくりひろげられた農村の社会主義教育運動は、政治・思想戦線での革命であり、農村の社会主義革命が新しい歴史的条件のもとで深化、発展したものである。この偉大な革命的大衆運動をめぐって、毛主席のプロレタリア革命路線と中国のフルシチョフのブルジョア反動路線とはまたもはげしい闘争をくりひろげた。

毛主席に代表されるプロレタリア革命路線は、二つの偉大なマルクス・レーニン主義の文献のなかに集中的にあらわれている。それは、すなわち毛主席がみずから主宰して制定した『中国共産党中央委員会の、当面の農村活動におけるいくつかの問題についての決定』（すなわち『十カ条』）と『農村の社会主義教育運動のなかでいま提起されているいくつかの問題』（つまり『二十三カ条』）である。

毛主席のこの路線にしたがえば、「階級闘争」というこのカナメをつかみ、社会主義と資本主義の二つの道の闘争と、このカナメをつかんで、「社会主義と資本主義の矛盾」を解決しなければならぬのである。

毛主席のこの路線にしたがえば、「労働者階級、貧農・下層中農、革命的幹部、革命的知識人およびその他の革命的な人びとに依拠し、九五パーセント以上の大衆を団結させ、九五パーセント以上の幹部を団結させることに注意をはらって」「いまわれわれに気遣いじみた攻撃をかけている資本主義勢力、封建勢力と、真っ向から対決する先鋭な闘争をおこなわなければならないのである。

毛主席のこの路線にしたがえば、「今回の運動の重点は、資本主義の道をあゆむ党内の実権派を肅正することにある」。「資本主義の道をあゆむ実権派には、表に出ているものもいれば、裏に隠れているものもある。」「これらの実権派を支持しているのは、「上部では、人民公社、区、県、地方、ひいては省や中央の部門で仕事をしている、社会主義に反対する一部のものである」。

このマルクス・レーニン主義の路線は、中国のフルシチョフをかしらとする党内最大の資本主義の道をあゆむひとにぎりの実権派の急所をつき、かれらの資本主義復活の甘い夢を破壊させた。かれらは形勢不利とみて、反革命の二面的な手口をもちい、社会主義教育運動のスロー

ガンをかすめとって、形は「左」だが実際は右のブルジョア反動路線をうちだした。

そのとき、まっさきにとびだしたのは、ほかでもなく、資本主義の道をあゆむもうひとりの党内最大の実権派であった。この男は、一貫して中国のフルシチョフとグルになって悪事をはたらき、農村の社会主義革命に反対してきた。農業協同組合を大幅にきりすてたときもかれは加わっており、「三自一包」を鼓吹したときもかれは加わっており、今回もかれは加わっていた。偉大な社会主義教育運動の『十カ条』が公布されて四ヶ月もたたないのに、かれは大急ぎで『後の十カ条』（草案）をデッチあげて、『十カ条』と直接対抗させた。

この『後の十カ条』（草案）は、かんじんなものをぬきとるといふ反革命の手口をもちいて、二つの階級、二つの道の闘争という根本的内容をぬきさり、毛主席が『十カ条』のなかで明確に規定した社会主義教育運動の路線、方針、政策をすっかりすてたものであった。それは、「具体的な政策の限界」をはっきりと画きなければならないという看板をかかげて、あらゆる方法で、農村の資本主義勢力を免罪し、広範な大衆の手足をしばりつけ、党内におけるブルジョア階級の代理人を極力かばっている。またそれは、「社会主義教育」の名目で、闘争のほこ先を貧農、下層中農にむけている。資本主義の道をあゆむもうひとりの党内最大の实権

派がこの大毒草をもちだしたのは、ブルジョア反動路線で毛主席がみずから点じた社会主義教育運動の革命の烈火を消しとめようとたくらんだからであった。これは、社会主義に反対し、資本主義を復活させようとするかれの極悪な犯罪行為の一つである。

つづいて、中国のフルシチョフは、その妻王××を「蹲点」（下部組織に腰をすえて活動すること＝訳注）させ、悪臭プンプンたる「桃園の経験」をつくらせて、恥しらずにも、それを全国いたるところ吹きあるき、自己宣伝につとめた。しかも、かれはこの「経験」にもとづいて、『後の十カ条』（草案）を手直しして、『修正草案』をつくりあげた。これは形は「左」だが実際は右のブルジョア反動路線の代表作であり、毛主席のプロレタリア革命路線に反対する反動的綱領であった。

中国のフルシチョフが、この形は「左」だが実際は右のブルジョア反動路線をうちだしたのは、社会主義教育運動の指導権をのっとり、この偉大な革命運動をわき道にそらせようという陰謀をたくらんでいたからである。これは、中国のフルシチョフが貧農、下層中農に残酷な弾圧をくわえ、プロレタリア階級の手から権力を奪おうとした大陰謀であった。かれにあやつられていたある地方では、一時期、この形は「左」だが実際は右の路線の害毒をうけて、少な

らぬ貧農、下層中農が「反革命分子」に仕立てあげられ、権力を奪われた。毛主席のプロレタリア革命路線にみちびかれた社会主義教育運動の偉大な成果は、このために重大な損害をこうむったのである。

中国のフルシチョフは、社会主義と資本主義の矛盾というこのもつとも根本的な問題を極力回避して、社会主義教育運動の性質は、「四清と四不清の矛盾」（四清とは、政治を清め、思想を清め、組織を清め、経済を清めることである―訳注）だとか、「党内外の矛盾の交差、あるいは敵味方の矛盾と人民内部の矛盾の交差」だなどとさかんにまくしたてた。かれがこうした「目かくしの手」をもてあそんだのは、第一には、革命的人民にブルジョア階級にたいするプロレタリア階級の階級闘争を忘れさせ、プロレタリア独裁を忘れさせようとしたためであり、第二には、ほこ先を広範な貧農、下層中農と、広範なよい幹部と比較的よい幹部にむけて、党内の資本主義の道をあゆむひとにぎりの実権派が暴露されないようかばうためであった。これは、きわめて悪らつな陰謀である。

中国のフルシチョフは、広範な革命的大衆と革命的幹部がほんとうに立ちあがり、毛主席のプロレタリア革命路線と党の方針、政策をつかんで、かれの手下どもをあばきだすようになる

のを極度におそれた。そのため、かれは国民党の「訓政」という手段をもちだして、大衆を押しさえつけ、革命的幹部に打撃をあたえ、運動をひっそりと活気のないものにして、階級闘争のフタをしつかりとどし、社会主義教育運動をおざなりにすませようとしたのである。

中国のフルシチョフとその一味が二つの道の闘争をまっ殺したのも、大衆を押しつけたのも、革命的幹部に打撃をあたえたのも、結局は、資本主義の道をあゆむ党内の実権派をまもり、かれら自身をまもるために、水をかきまわしてにがらせ、階級戦線を混乱させ、闘争目標をそらし、大勢のものに打撃をあたえようとしたからにほかならない。

中国のフルシチョフの、この形は「左」だが実際は右のブルジョア反動路線は、社会主義教育運動を資本主義復活の軌道にのせる路線であり、プロレタリア独裁を瓦解させ、プロレタリア独裁をブルジョア独裁に変える路線であった。

この路線はとびだしたとたん、広範な革命的大衆、広範な革命的幹部から排斥され、反対された。毛主席がみずから制定した『二十三カ条』というこの偉大な歴史的意義をもつ文献の公布によって、このブルジョア反動路線は破産を宣告された。毛主席のプロレタリア革命路線にみちびかれて、社会主義教育運動は偉大な成果をおさめた。農村の資本主義勢力は重大な打撃

をうけた。人民公社はいちだんと強固になり、農村における社会主義の陣地はいちだんと強化された。これにつづくプロレタリア文化大革命は、農村の社会主義革命運動をさらに、まったく新しい段階へとひきあげたのである。

「私心とたたかい、修正主義を批判する」をカナメとして、
農村における二つの道の闘争を最後までおしすすめよう

わが国五億の農民は、偉大な舵手毛主席のあとにしっかりとしたがって、暗礁や浅瀬をさけ、邪風や迷雾にうちかち、社会主義の航路にそって、十八年にわたる輝かしい戦闘の航程をたどってきた。

この十八年らしい農村における二つの道、二つの路線の闘争の歴史は、われわれにきわめてゆたかな経験をもたらした。そのなかでもっとも重要なものはつぎの諸点である。

第一、「社会主義社会はかなり長い歴史的段階である。社会主義というこの歴史的段階においては、なお階級、階級矛盾と階級闘争が存在し、社会主義と資本主義の二つの道の闘争が存在し、資本主義復活の危険性が存在している。」農村では、打倒された地主や富農はその滅亡

に甘んじないでつねに復活をたくらんでいるために、社会になおブルジョア階級の影響と旧社会の習慣の力が存在しているために、また小生産者の資本主義への自然発生的傾向が存在しているために、階級闘争は一貫してひじょうに複雑で、ひじょうに鋭く、歴史の転換期にさしかかるたびに、つねにきわめて激烈なものとなった。農村における社会主義革命の問題をめぐる、毛主席のプロレタリア革命路線と中国のフルシチョフのブルジョア反動路線との闘争は、こうした闘争の党内における集中的な反映にほかならない。広範な貧農、下層中農と革命的幹部は、社会主義の道を堅持するには、党内における二つの路線の闘争を最後までおしすすめ、中国のフルシチョフのブルジョア反動路線を徹底的に批判して、その害毒を完全に一掃しなければならぬ。

第二、革命の根本問題は権力の問題である。農村における二つの道、二つの路線の闘争は、とどのつまり、プロレタリア独裁の強化とプロレタリア独裁の転覆との闘争にほかならない。プロレタリア独裁の新しい歴史的条件のもとで、階級敵はプロレタリア独裁の転覆というかれらの犯罪的な目的を上げるために、つねに腐食・侵食、分化・瓦解、ひきずりだし、もぐりこみなどの硬軟両様の手段をつかって、党内に自分の代理人をさがし求めようとする。党内の資

本主義の道をあゆむひとにぎりの実権派は、広範な貧農、下層中農のもっとも主要な、もっとも危険な敵である。中国のフルシチョフはかれらの大黒幕である。かれが農村でブルジョア反動路線をかたくなにおしすすめたことは、中国で資本主義の復活を実現させ、プロレタリア独裁をブルジョア独裁に変えようとするかれの反革命陰謀のきわめて重要な構成部分であった。われわれがもし党内の資本主義の道をあゆむひとにぎりの実権派に権力をのっとることを許したならば、われわれはもとの道へひきかえして、過去の苦しみをもう一度なめることになるだろう。

第三、農業協同化が実現されてからも、経済戦線での社会主義革命はまだ終わってはいない。社会主義的集団所有制の強化と社会主義的集団所有制の破壊との闘争は、依然としてきわだって重要な問題である。「三自一包」をさかんにおしすすめることは、階級敵が社会主義的集団所有制を腐食、瓦解させるために用いる重要な方式の一つである。プロレタリア階級と貧農、下層中農は、プロレタリア独裁の強大な力を用いて、社会主義的集団所有制を強化、発展させ、ともに豊かになる道をあゆまなければならない。

第四、広範な貧農、下層中農は、われわれが社会主義を建設していくうえでの農村における社会的基礎であり、農村でプロレタリア独裁を実現していくうえで依拠する力である。中国のフルシチョフは、農村で資本主義の復活を実現するために、つねに地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子に依拠して貧農、下層中農に打撃をあたえたといいブルジョア階級の階級路線を固持してきた。われわれは、それとは正反対の行動をとらなければならない。社会主義の全歴史的時期にわたって、貧農、下層中農に依拠し、中農と団結するプロレタリア階級の階級路線を堅持して、社会主義の道を堅持する人びとの手に権力をしっかりとにぎらせなければならない。

第五、「重大な問題は農民の教育である。」党の農村における「政治工作の基本的任務は、農民大衆にたえず社会主義思想をそそぎこみ、資本主義への傾向を批判することである」。ところが、中国のフルシチョフは農民の社会主義的積極性に必死になって打撃をあたえ、物質による刺激をさかんにおこない、資本主義への自然発生的傾向を極力誘発し、利用して、資本主義の復活に奉仕しようとした。これは、農民にたいする思想上の指導権を争奪するきびしい闘争である。広範な農民大衆と革命的幹部は、かならずプロレタリア階級の政治を前面におしだし、毛沢東思想による統率を堅持し、中国のフルシチョフの修正主義を思いきり批判すると同

時に、ブルジョア階級の「私」とも思いきりたたかひ、修正主義の根を一步一步とりのぞいていかなければならない。

十八年らしい、中国のフルシチョフは、ブルジョア階級の反動的立場をかたく固持し、広範な貧農、下層中農を敵にまわして、かく乱、失敗、ふたたびかく乱、ふたたび失敗の道をあゆんできたが、今回のプロレタリア文化大革命で、とうとう完全に滅亡してしまった。農村の社会主義革命に対抗するかれの例のブルジョア反動路線も、いま歴史のゴミのためのなかに掃きすてられつつある。

農村における二つの道、二つの路線の闘争は、かならず最後までおしすすめなければならぬ。広大な農村のプロレタリア文化大革命は、かならず毛主席のさし示した方向にしたがつて、最後までおしすすめなければならぬ。

毛沢東思想の偉大な赤旗を、祖国の農村に高々とひるがえそう！ 永遠にひるがえそう！

中国農村における二つの道の闘争

1968年 初版発行

定価 40 円

出版者

外文出版社
(北京阜成門外百万莊)

発行者

中国国際書店
(北京 P. O. Box 399)

編号: (日)3050-1776

3-J-809P

00021

既刊図書案内

★毛沢東著作★

毛沢東選集 (第一卷)

三〇〇円

本巻には、第一次国内革命戦争の時期（一九二四～一九二七年）と第二次国内革命戦争の時期（一九二七～一九三七年）における毛沢東同志の十七編の著作がおさめられている。

毛沢東著作選

上製
並製
五八〇円
四四〇円

本書は、日本の広範な読者の毛沢東著作学習の必要にこたえて、毛沢東著作選読編集委員会が中国共産党中央委員会毛沢東選集出版委員会の指導のもとに編集した『毛沢東著作選読（甲種本）』（一九六五年四月第二版）を完訳したもので、中国革命の各時期における毛沢東同志の著作の一部三十九編がおさめられている。

毛主席語録

赤色ビニール表紙
一五〇円

毛沢東主席の人民戦争についての語録

赤色ビニール表紙

二〇円

中国社会各階級の分析

三〇円

湖南省農民運動の視察報告

六〇円

中国の赤色政権はなぜ存在することができるのか

三〇円

大衆の生活に関心をよせ、活動方法に注意せよ

二〇円

新民主主義論

六〇円

延安の文学・芸術座談会における講話

四〇円

毛沢東同志は論じている——

帝国主義といっさいの反動派はハリコの虎である

四〇円

アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話

三〇円

「人民に奉仕する」「ベチューンを記念する」「愚公、山を移す」

四〇円

全世界の人民は団結して、アメリカ侵略者と

そのすべての手先をうち破ろう

三〇円

——アメリカ黒人、ベトナム南部人民、パナマ人民、日本人民とコンゴ
(レ)人民、ドミニカ人民の反米正義の闘争を支持する声明と談話

敵に反対されるのは悪いことではなく、よいことである

三〇円

書物主義に反対する

三〇円

農業協同化の問題について

四〇円

文学・芸術に関する五つの文獻

二〇円

出版者 北京 外文出版社 発行者 中国国際書店(北京)

出版者 北京 外文出版社 発行者 中国国際書店(北京)

★重要決定、理論論文★

国際共産主義運動の総路線についての論戦

目次内容

三四〇円

国際共産主義運動の総路線についての提案

ソ連共産党指導部とわれわれとの意見の相違の由来と発展
スターリン問題について

ユーゴスラビアは社会主義国か

新植民地主義の弁護人

戦争と平和の問題での二つの路線

根本的に対立している二つの平和共存政策

ソ連共産党指導部は現代最大の分裂主義者である

プロレタリア革命とフルシチョフ修正主義

フルシチョフのエセ共産主義とその世界的教訓

フルシチョフはなぜ退陣したか

付 録

ソ連共産党中央委員会が中国共産党中央委員会に於てた書簡

ソ連共産党中央委員会がソ連各級党組織と全共産黨員に於てた公開書簡

出版者 北京 外文出版社 発行者 中国国際書店 (北京)

人民戦争の勝利万歳

林彪

四〇円

——中国人民の抗日戦争勝利二十周年を記念して

目次内容

抗日戦争の時期における主要な矛盾と党の路線

統一戦線の路線と政策を正しく実行する

農民に依拠し、農村根拠地を樹立する

新しい型の人民の軍隊を建設する

人民戦争の戦略・戦術を実行する

自力更生の方針を堅持する

毛沢東同志の人民戦争にかんする理論のもつ国際的意義

人民戦争によってアメリカ帝国主義とその手先にうち勝つ

フルシチョフ修正主義者は人民戦争の裏切り者である

中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定

三〇円

中国共産党第八期中央委員会第十一回総会の公報

三〇円

出版者 北京 外文出版社 発行者 中国国際書店 (北京)

近刊予告

★毛沢東著作★

毛沢東選集 (第二卷)

哲学論文四編

目次内容

実践論

矛盾論

人民内部の矛盾を正しく処理する問題について
人間の正しい思想はどこからくるのか

党内のあやまった思想の是正について

小さな火花も広野を焼きつくす

日本帝国主義に反対する戦術について

中国革命戦争の戦略問題

抗日の時期における中国共産党の任務

実践論

矛盾論

人民内部の矛盾を正しく処理する問題について

中国共産党全国宣伝工作会議における講話

人間の正しい思想はどこからくるのか

